

松 山 大 学 論 集  
第 33 卷 第 5 号 抜 刷  
2 0 2 1 年 12 月 発 行

## 移 民 と 宗 教

—— モントリオールのコプト移民コミュニティーにみる  
教会が持つ多様な機能 ——

岩 崎 真 紀

# 移民と宗教

—— モントリオールのコプト移民コミュニティーにみる  
教会が持つ多様な機能 ——

岩 崎 真 紀

## 1. はじめに

### 1.1 移民にとっての宗教の重要性

2019年、エジプトの宗教的マイノリティー<sup>1)</sup>であるコプト正教会 (Coptic Orthodox Church) を信仰する移民家庭に生まれ育った北米の俳優たちが世界的活躍をみせた年だった。2月に『ボヘミアン・ラブソディー』(2018年, 米) 主演のラミ・マレック (Rami Malek, アラビア語エジプト方言<sup>2)</sup> に則した発音では Rāmī Mālik) がアカデミー賞主演男優賞を受賞し, 5月にはメナ・マスード (Mena Massoud, Mīnā Mas‘ūd) が主演をつとめた実写版『アラジン』(2019年, 米) が公開され, その後高い興行成績を収めた。これら2人の俳優の両親はエジプトから北米に移民したコプト正教徒 (以下, コプト) であり, マレックがアメリカ・ロサンゼルスに生まれ育ったコプト移民2世 (ホスト国生まれで親の出身地が外国である人) であるのに対し, マスードはエジプト・カイロに生まれ, カナダ・トロントで育った1.5世である<sup>3)</sup>。コプト正教会とのつながりに言及したインタビューにおいて, マレックは「わたしはコプト教会に通ってました」と過去形で語り, マスードは「わたしたち〔家族と自分〕はコプト・キリスト教徒です」と述べている<sup>4)</sup>。信仰に対する帰属意識の違いはあれど, 宗教は2人がみずからのアイデンティティーや生い立ちを語る際にほぼ常に触れる事柄のひとつである。彼らと宗教との深いつながりは, コプト移民にとって宗教が重要な意味を持っていることを象徴している。

本稿では、そうしたことを念頭においたうえで、移民が築いた宗教組織が持つ役割や機能について、カナダで2番目に人口の多い都市モントリオールに位置する聖ジョージ聖ヨセフ・コプト正教会（St. George and St. Joseph Coptic Orthodox Church, Montreal, 以下、聖ジョージ教会）を事例として検討する<sup>5)</sup>。移民がホスト社会へ適応する際、宗教組織はもっとも大きな役割を果たすといわれる（Breton, 1964）。母語による礼拝や出身国でのかたちと同じ儀礼を通じて、教会や寺院は移民の信仰や文化を次世代に継承する場として機能し、移民のアイデンティティー形成にも影響を与える（Ebaugh and Chafetz, 2000）。アメリカでは移民がホスト社会に適応するうえで宗教は3つのR、すなわち、Refuge（避難所）、Respectability（体面の維持）、Resources（資源）の役割を果たすとされる（Hirschman, 2004）。これら先行研究による分析は、筆者が調査する欧米のコプト正教会にもほぼ当てはまる。

## 1.2 本稿の構成

次章以下の本稿の構成はつぎのとおりである。第2章でコプトを含むアラブ系移民<sup>6)</sup> コミュニティーのカナダにおける歴史と現状について考察する。第3章ではコプト正教会全般の特徴を概観し、第4章でカナダのコプト移民コミュニティの誕生と発展について論じる。第5章と第6章ではモントリオール市ピエールフォン・ロクスボロ区（Arrondissement Pierrefonds-Roxboro<sup>7)</sup>）にある聖ジョージ教会の活動を事例として、コプト移民コミュニティのなかでコプト正教会が持つ機能について明らかにする。最後の第7章では2020年1月前後から2021年7月の本稿執筆時点でも世界的に感染が拡大する新型コロナウイルス（COVID-19）がエジプトとカナダのコプト移民コミュニティに与えた影響と、そのなかで教会が果たした役割について若干の考察を行う。

本稿で事例として用いるデータは2013年8月から2019年8月まで筆者がモントリオールで断続的につづけてきたフィールドワークに基づくものである。1回あたりの調査日数は10～20日間で、調査には英語もしくはアラビア語エ

ジプト方言を用いた。内容はミサ (Divine Liturgy, 正教会の用語では聖体礼儀)<sup>8)</sup>、日曜学校、ユースグループ活動、講演会、教会間交流会、コプト家庭ホームステイ・訪問等での参与観察、聖職者および一般信徒への非構造化インタビューが中心である。また必要に応じてエジプト、フランス、イギリス、日本のコプト正教会の現地調査で得た情報も活用する。なお、フィールドワークおよびその結果を本稿で論じることについては、司祭および関係する信徒から許可を得ている。プライバシーの関係から一般的に名を知られている教会と高位聖職者以外は、教会名や個人名を伏せることとする。

最後に「移民」の定義について整理しておく。「移民」という用語は現在これだけ頻繁に使用されるにもかかわらず公的かつ法的に決まった定義は存在しない。国連ではそれを認めたくて、「国際移民 (international migrant)」に関してほとんどの専門家が同意している内容として「理由や法的地位に関わらず、定住国を変えた人」としている (United Nations, 2020)。一方、カナダ統計局では移民とは永住権保持者 (厳密には「永住許可を得た移民」 (landed immigrant) もしくは「永住者」 (permanent resident) を意味する (Statistics Canada, 2021a)。本稿では国連の定義に基づいて用いることとする。

## 2. カナダのアラブ系移民

### 2.1 カナダのアラブ系移民の歴史

アラブ地域の人々がカナダへ移住した歴史は比較的早く、1880年代に遡る (Eid, 2007, p. 4)。最初に移住した人々のほとんどは当時オスマン朝支配下にあった大シリア (Greater Syria, 現在のシリア, レバノン, ヨルダン, イスラエル [パレスティナ] の領域にほぼ相当する地域) のレバノン山脈出身だった (Suleiman, 1999)。その大半はマロン派 (The Syriac Maronite Church of Antioch), メルキト派 (Melkite Greek Catholic Church), ギリシア正教会 (Greek Orthodox Church) のいずれかの宗派に属するキリスト教徒だった (Kayal, 1983)。

彼らの海外移住はつぎに示すような、中東地域の政治や欧州諸国との関係のなかで起きた宗教を理由とした迫害、搾取、貧困の結果もたらされた。1点目は大シリアが当時の支配王朝であったオスマン朝（1299-1922）の首都イスタンブールに近く、他地域に比べ厳格に統治されていた点、2点目はオスマン朝の抑圧が同じシリア人であってもムスリムよりキリスト教徒に対して厳しかった点、3点目はオスマン朝によってキリスト教宗派間の関係が悪化させられていた点、4点目はレバノン山脈一帯がもともと農業生産力が低かったうえ、頼みにしていた絹産業も衰退し経済的に困窮していた点、そして5点目として欧州の植民地政策により、宗教／宗派間の分断がもたらされたことが挙げられる（Eid, 2007, p. 4）。

## 2.2 現代カナダにおけるアラブ系移民

本節ではコプトも含むカナダ全体および調査地域におけるアラブ系住民の現状に関して、2001年の統計をもとにしたカナダ統計局の報告書「カナダのアラブ人コミュニティ（The Arab Community in Canada）」（Statistics Canada, 2007）と2016年の国勢調査の統計データ（Statistics Canada, 2017a, b；Montréal en statistiques, 2018）を用いて考察する。

2001年の統計ではアラブ系住民はカナダ全体の非欧州系民族集団のなかで最大規模の集団の1つである（Statistics Canada, 2007, p. 1）。その人口のほとんどはオンタリオ州とケベック州に集中しており、なかでも後者の主要都市モントリオールにはもっとも多く、アラブ系住民全体の36%が住んでいる（Statistics Canada, 2007, p. 2）。2016年のケベック州のヴィジブル・マイノリティ<sup>9)</sup>に関する統計では、州人口の4%を占める黒人系住民（Black）に次いでアラブ系は2番目に多く、2.7%を占める（Statistics Canada, 2016）。

全移民人口に対する出身国別の割合に関する2016年の統計をみると、ケベック州では3位にモロッコ（60,700人、7.4%）、4位にアルジェリア（59,465人、5.4%）が入っており、フランス語圏であるマグリブ（西アラブ諸国を意

味し、通常、チュニジア、アルジェリア、モロッコより成る）からの移民が多い（表2）。これに対して筆者の調査地であるモンリオール市ピエールフォンーロクスボロ区では1位をエジプト（2,705人、9.7%）、5位をレバノン（1,190人、4.3%）出身者が占める（表3）。2011年から2016年のあいだに永住権を獲得した新移民（recent/new immigrant）であるアラブ系移民の出身国もほぼ同じ構成だが、順位や割合に変化がある（表4～6）。とくにピエールフォンーロクスボロ区（表6）で1位を占めるエジプト人の割合（1,210人、27.8%）

移民の出身国上位5か国（2016年）

	表1			表2			表3		
	カナダ			ケベック州			ピエールフォンーロクスボロ区		
	総人口 7,540,825 人			総人口 1,091,305 人			総人口 27,750 人		
	出身国	人数	%	出身国	人数	%	出身国	人数	%
1	インド	668,570	8.9	フランス	81,220	7.4	エジプト	2,705	9.7
2	中国	659,260	8.6	ハイチ	80,960	7.4	ハイチ	1,675	6.0
3	フィリピン	588,305	7.8	モロッコ	60,700	5.6	インド	1,610	5.8
4	イギリス	499,120	6.6	アルジェリア	59,465	5.4	フィリピン	1,385	5.0
5	アメリカ	253,715	4.7	イタリア	51,025	4.7	レバノン	1,190	4.3

2011年～2016年に永住権を獲得した新移民の出身国上位5か国

	表4			表5			表6		
	カナダ			ケベック州			ピエールフォンーロクスボロ区		
	総人口 1,212,075 人			総人口 215,170 人			総人口 4,360 人		
	出身国	人数	%	出身国	人数	%	出身国	人数	%
1	フィリピン	188,805	15.6	フランス	20,030	9.3	エジプト	1,210	27.8
2	インド	147,190	12.1	ハイチ	16,875	7.8	ハイチ	445	10.2
3	中国	129,020	10.6	アルジェリア	16,380	7.6	フィリピン	225	5.2
4	イラン	42,070	3.5	モロッコ	13,480	6.3	中国	200	4.6
5	パキスタン	41,480	3.4	中国	10,705	5.0	イラン	165	3.8

出典：表1、4. Statistics Canada (2017a), 表2、5. Statistics Canada (2017b), 表3、6. Montréal en statistiques (2018, pp. 20-21)

がそれ以前の年の割合より3倍近く多い点が目を引く。この詳細については第5章で詳述する。

民族的出自を問わず移民全般でみると、2016年のカナダ総人口に占める移民の割合は21%、ケベック州では14%である。これに対して、ピエールフォン-ロクスボロ区は40%と移民の割合が非常に高いことも特徴的である。

教育についてアラブ系住民は高い水準を示し、2001年の統計では30%が大学もしくは大学院の学位を持っており、これは15%という全国平均の倍にあたる(Statistics Canada, 2007, p. 2)。後述するように、コプト正教徒コミュニティの信徒たちもほとんどが大学に進学している。

宗教に関する2001年の統計でも興味深い結果が出ている。アラブ諸国では割合の違いはあれ、すべての国でムスリムが多数派を占め、キリスト教徒は少数派である。しかしアラブ系カナダ人のあいだでは両者の割合は同数の44%を示している(Statistics Canada, 2007, p. 3)。つまり、一部のアラブ諸国ではムスリムよりもキリスト教徒の方が高い割合でカナダに移民していると考えられる。この背景には前章でみたように、アラブ諸国のキリスト教徒が歴史のなかで置かれた周縁的な立場が関係している。

### 3. コプト正教会とは——キリスト教世界そして イスラーム社会のマイノリティー

コプトという語はエジプトを意味する「アイギュプトス(aigyptos)」というギリシア語に由来する(アティーヤ, 2014, p. 33)。7世紀にアラビア半島のアラブ人がエジプトにイスラームをもたらした際、彼らはエジプト人を「キプト/ギプト」(Qibt, Gybt, アイギュプトスの転訛, 英語ではCopt)と呼んだ。エジプトは1~2世紀にキリスト教を受容しており<sup>10)</sup>当時の民の大半はキリスト教徒であったため、アラブ人ムスリムにとってこの語は「エジプト人」であると同時に「キリスト教徒」をも意味するようになり、現代のエジプトでは「エジプト人キリスト教徒」という意味で用いられる。

「コプト」と一口にいても、コプト正教徒のほか、近代の西欧キリスト教諸派による宣教活動の影響で分派したコプト・カトリックとコプト・プロテスタントの計3宗派が存在する（アティーヤ, 2014, pp. 162-163）。そのなかでもっとも多くを占めるのがコプト正教会であり、中東地域においても最大のキリスト教共同体を形成する（中東教会協議会, 1993, p. 39; Iskander, 2012, p. 12）。

コプト正教会はキリスト教の宗派としては非カルケドン派<sup>11)</sup>（東方諸教会）に属する。ローマ・カトリック教会やプロテスタント教会が力を持つ現在のキリスト教世界では、コプトは宗派的マイノリティーである。また、ムスリムが多数を占めるエジプトでは、総人口（約9,000万人<sup>12)</sup>）のなかで10%前後（約900万人）を占める宗教的マイノリティーである（Botros, 2006, p. 195; Brinkerhoff and Riddle, 2012 など）<sup>13)</sup>。エジプトのムスリムとコプトは約1400年にわたり共存し、さまざまな共通点もある一方、中世から現代にいたるまでコプトがムスリムによる迫害の対象になることも少なくない（Hasan, 2003, 岩崎, 2012）。

このようにコプトは二重の意味でマイノリティーだが、エジプトに住むコプト自身は「マイノリティー (aqalliyah)」という自称／他称を拒否している<sup>14)</sup>。それは彼らがみずからの歴史に対して持つ「二重の誇り」（山形, 1987, p. 22）と表裏一体の関係にある。その誇りとは、1つは聖家族（幼子イエスと聖母マリアとその夫ヨセフ）がパレスティナでの迫害から逃れて選んだ土地がエジプトであり（アティーヤ, 2014, pp. 39-42）、その地でコプトが独自の宗派を育んできたこと、もう1つはムスリムは7世紀にアラビア半島からやってきた外来者であり、（史実はともあれ）コプトこそが古代エジプト人の末裔すなわちエジプトの先住民であるということに由来する。このような歴史認識は、コプトが西洋中心のキリスト教世界にもイスラーム社会にも同化・吸収されることなく、2000年以上にわたり信仰共同体を持続させることを可能にした大きな要素の1つとして考えられる（岩崎, 2013, p. 31）。



コプト正教会には厳格な宗教的ヒエラルキーが存在し、総主教（正式名称の英訳：Pope of Alexandria and Patriarch of all African on the Holy See of St. Mark the Apostle）がその頂点に位置する（アティーヤ、2014、p. 176）。初代は聖マルコとされ、現在の総主教タワードロスⅡ世（al-Bābā Tawāḍurūs、在位 2012～）は第 118 代目にあたる。古代エジプト語にルーツを持つコプト語（現代ではおもにミサと日曜学校でのみ使用）、キリスト教世界で最初に形成された修道制、総計で1年の半分以上の期間に及ぶ動物性たんぱく質を含む食品を断つ断食（復活祭断食の際には魚類も断つ）、殉教や奇跡と結びついた聖人崇敬、そして、ときに3時間に及ぶ長いミサなど、さまざまな信仰実践を通じてコプトはエジプトで長い歴史を築き、20世紀以降は世界にその宗教コミュニティを広げている。

#### 4. カナダにおけるコプト移民コミュニティの誕生と発展

コプトのカナダへの移民のはじまりも、他のアラブ系移民コミュニティ同様、母国の政治や社会の変化と深く関わりがある。エジプトからの移民がカナダにやってきたのは大シリア出身者よりも約70年遅く、1950年代に入ってからのことである（Loewen, 2008, p. 27）。きっかけは1952年のガマル・アブドゥン=ナーセル（1918-1970）ら自由将校団によるエジプト革命だった。社会主義的政策を推進するナーセル政権（1956-1970）下で、私有財産が没収されることを恐れた富裕層が信仰を問わず欧米諸国へ移住したのが端緒である（Stene, 1997, p. 255）。コプトが最初に移住したカナダの都市はモントリオールだった（Loewen, 2008, p. 27）。その後15年のあいだに北米ではモントリオール、トロント、ジャージー・シティー、ロサンジェルスにコプト移民コミュニティが築かれた（Loewen, 2008, p. 27）。1960年代後半になると北米で最初にできたこの4つのコミュニティがコプト正教会の代理人となる存在をエジプトから迎えることを要望したことから、第116代総主教キュリロスⅥ世（al-Bābā Kyrillus、在位 1959-1971）は彼らに対して司祭を派遣した（Loewen, 2008, p.

27-32)。これによりカナダでは1964年に最初のコプト正教会がトロントに設立された (Marcos, Marcos, 1981, p. 66)。

つづくサード政権 (1970-1981) 下では、門戸開放政策によって1970年代にエジプトから海外へ移住する信徒が爆発的に増加した (Stene, 1997, p. 255)。1971年に第117代総主教に就任したシェヌーダ三世 (al-Bābā Shinūdah, 在位1971-2012) は、海外在住のコプトが母国のコプト・コミュニティとのつながりを維持し、その子孫もまたコプトとしてのアイデンティティーを保ちつづけられるよう、才能ある若い司祭をエジプトから北米、欧州、豪州へ派遣した (Hasan, 2003, pp. 129-130)。それから50年近く経った2020年代の欧米におけるコプト移民コミュニティの発展をみると、シェヌーダ三世総主教の目的は十分果たされたといえよう。

信徒ボランティアによる世界のコプト正教会の所在地をまとめた書き込み式ウェブサイト “Nihov’s Worldwide Coptic Directory” (2020) をもとに筆者が調べた限り、2020年3月時点で、少なくともエジプトを除く55カ国に495の教会、修道院、神学校などのコプト関連施設が存在する。2016年7月には日本でも京都に教会が開堂された (土門, 2016)。

カナダのコプト正教会に目を移すと、ミシサガ・ヴァンクーヴァー・西部カナダ主教区、オタワ・モントリオール・東部カナダ主教区 (以下、モントリオール主教区)、北米大主教区の3つの主教区があり、各教会は所在地に応じていずれかの主教区に所属する。このうちモントリオール主教区は、教区民が長年切望した結果、2019年8月によく誕生したばかりの新しい主教区である。カナダ全土では53教会、2修道院、このうちオンタリオ州に30教会、2修道院、ケベック州に8教会あり、この2州だけで全体の75%を占める。

2011年の国勢調査ではカナダの総人口約2,960万人のうち、コプト正教徒と回答した人はたった16,255人であるが (Statistics Canada, 2019)、あまりに低いこの数値は明らかな誤りである<sup>15)</sup>。これに対して、時期は前後するが、1999年のデータをもとにした2006年のブートロスの研究では20万人とされている

(Botros, 2006, p. 195)。2007年にローウェン (Loewen, 2008, p. 11) が行った調査によれば、トロント大都市圏の4つのコプト正教会だけでも信徒数は1教会あたり200~2,000世帯である。また、筆者が2014年に聖ジョージ教会の調査を行った際にも、同教会に所属する世帯は1,700世帯あり、1世帯を4人とするとこの教会だけで約6,800人の信徒を有する。これらのことから、カナダのコプト人口は国勢調査のデータよりもずっと多いものと推測される。

このようにコプト移民の人口がはっきりしないことにはいくつかの理由がある。1点目として、これは他国のコプト移民コミュニティにも共通することだが、ホスト社会の多くが移民の宗教的帰属の統計をとっていないか、とっていても不正確なこと、2点目は、エジプトのコプト正教会が全世界のコプトに関する体系的なデータを公表していない（おそらく全体的な統計をとっていない）こと、3点目としては、個々の教会の多くが信徒数を個人ではなく家族単位で把握しており、それとても概算であることが多いため、教会単位での正確な数値を得ることも難しいという点が挙げられる。

## 5. エジプト人移民の多い地区 —— モントリオール市 ピエールフォンーロクスボロ区

本稿が対象とする聖ジョージ教会は、モントリオール市西部のピエールフォンーロクスボロ区 (Arrondissement Pierrefonds-Roxboro) のやや南西、モントリオール市中心部からは約30 kmの場所に位置する。Google MAPでは車で所要時間は約30分と表示されるが、高速道路の渋滞が頻繁に起こるため、45分から1時間前後かかることもある。公共交通機関を使用した場合の所要時間は地下鉄とバスを乗り継ぎ約1時間半である。教会は幹線道路であるピエールフォン通り沿いに位置し、近隣には緑豊かな住宅街が広がる。よく手入れされた庭を持つ比較的小ぶりの戸建て住宅や集合住宅が多く、治安も比較的安定した地域である。

第2章で考察したように、移民に着目した場合、ピエールフォンーロクスボ

ロ区の人口には2つの特徴がある。1つは全人口に対する移民の比率が高い点であり、もう1つはエジプト出身者が極めて多い点である(表3)。2016年のこの地区の人口は約69,000人<sup>16)</sup>で、そのうち約40%の27,750人が移民である(Montréal en statistiques, 2018, p. 7)。この数値はモンリオール大都市圏(Census Metropolitan Area)の全人口に占める移民の割合が23.4%(Arora, 2019, p. 11)であるのに比べると2倍近い<sup>17)</sup>ピエールフォン-ロクスボロ区に住むエジプト出身者は2,705人で同区の全移民の9.7%にあたる。これにつづくのはハイチ(1,675人, 6.0%)、インド(1,610人, 5.8%)の各出身者である(Montréal en statistiques, 2018, p. 20)。

とくに2011年から2016年のあいだに永住権を取得した外国生まれの「新移民」(new immigrants)のなかでエジプト出身者の数は突出して多く、全新移民4,360人のうち27.8%にあたる1,210人にのぼり(Montréal en statistiques, 2018, p. 21)(表6)、2位のハイチ(445人, 10.2%)、3位のフィリピン(225人, 5.2%)を大きく引き離している。なお、このデータにおける「移民」のなかには、民族的ルーツが外国にあってもカナダで生まれた2世や3世は含まれていないため、エジプト人というアイデンティティーを持つ住民の数は実際にはさらに多いと考えられる。

一方、ケベック州全体の民族的・文化的出自に関する2016年の人口統計では、20位までに入る中東諸国はモロッコ(12位)、レバノン(15位)、アルジェリア(19位)である(Statistics Canada, 2017b)。これら3カ国はかつてフランスの植民地や委任統治領だったことからフランス語が広く普及しているため、フランコフォン(francophone、普段の生活で主にフランス語を話す人々)であるケベックを移民先として選ぶインセンティブがある。これに対して現在エジプトではフランス語よりも英語が普及しているため、ケベック全体としてはエジプト出身者は、先に挙げたフランコフォンの3カ国の出身者ほど多くない。

こうしたケベック全体の状況とは異なり、ピエールフォン-ロクスボロ区に

エジプト出身者が際立って多いのは、以下に論じるようにこの地域がアングロフォン（anglophone、普段の生活でもに英語を話す人々）であることと関係していると考えられる<sup>18)</sup>

ピエールフォンーロクスボロ区は隣接するドラール・デ・ゾルモー市（Ville de Dollard-des-Ormeaux）やキルクラン町（Ville de Kirkland）などとともに通称ウェスト・アイランド（West Island）と呼ばれる非公式の地域を形成し<sup>19)</sup> ケベックには珍しくアングロフォンが多く住む<sup>20)</sup> 2016年のピエールフォンーロクスボロ区に関する統計では、母語を1言語とした回答者（64,595人）のなかで全体に占める割合が多かった言語は順に、非公用語41.6%、英語30.9%、フランス語27.5%である。複数言語とした回答者（4,370人）では、英語とフランス語31.4%、英語と非公用語29.6%、フランス語と非公用語23.2%、英語とフランス語と非公用語15.6%である（いずれの比率も *Montréal en statistiques*, 2018, p. 17の数値をもとに計算）。

これに対してモントリオール大都市圏の母語に関する統計では、フランス語64.1%、その他（英仏以外）の言語22.8%、英語11%、英語とフランス語1.5%とフランコフォンがもっとも多く、移民の母語に特化した統計に関しても、その他の言語70.6%、フランス語20.8%、英語7.7%、英語とフランス語0.9%という比率である（Arora, 2019, p. 15）。これらと比較するとピエールフォンーロクスボロ区ではアングロフォンの比率が高く、また、移民が多い地域であることから非公用語を母語とする人口が多いことが分かる。

ピエールフォンーロクスボロ区にエジプト系移民が多いもう1つの理由は、聖ジョージ教会を中心にすでにエジプト系（コプト）コミュニティーが形成されていることが考えられる。2011年以降に新移民が飛躍的に増えている理由としては、エジプトで2011年に起きた「1月25日革命」（いわゆる「アラブの春」）で起きた民衆運動の1つによる大規模な社会変化が海外移民を誘発していることが指摘できるだろう。とくにこの「革命」以降、エジプトではコプトが組織的迫害の対象となることがあり、多数の死者を出す事件も数年おきに

起きている（たとえばBBC, 2011；2018）。聖ジョージ教会ではこの「革命」以降、信徒が大幅に増えている。

## 6. 移民コミュニティにおいて宗教組織が持つ機能

### 6.1 聖ジョージ教会の概要

#### 6.1.1 歴史<sup>21)</sup>

聖ジョージ教会は、1989年に当時の総主教シェヌーダ三世によってエジプトから派遣されたアバーヌーブ司祭（1939-2011）と、それ以前にモンリオールへ移民していた少数のコプトによって設立された。礼拝堂もなく聖職者も持たなかった先人たちにとり、司祭の到着は長年待ち望んだものであった。しかし、彼らが独立した建物を持つまでには5年、礼拝堂の完成までにはそれからさらに2年の歳月を要し、建設中は他の宗派の教会や学校体育館、司祭の自宅でミサが行われた。

1989年に組織としての聖ジョージ教会が設立された当初は建物がなかったため、日曜ミサはドルヴァル市（Cit  de Dorval）の聖コロンバ長老派教会（St-Columba-By-The-Lake Presbyterian Church）を借りるという状態が1年間つづいた。平日のミサは司祭の自宅地下室で行われることもあった。1990年には活動の場を近隣地域の学校体育館や輔祭のひとりが所有する倉庫などに移し、結果として1年間で3回の移転を経験することとなった。度重なる移転は信徒にとっては苦難の連続だったが、同年11月には教会施設建設用地を購入することとなった。建物の建設完了までにはさらに3年の月日を擁するのだが、1991年3月にはエジプトから総主教シェヌーダ三世を迎え、建設予定地に巨大テントを設え、起工式が行われた。この式典にはコプト正教徒だけでなく、モンリオールの要人も数多く出席した。連邦政府からは市民権・多文化主義大臣および運輸大臣、州政府からは州首相、地方政府からはピエールフォン臨時市長（当時は区ではなく市）およびポワン・クレア市長、キリスト教界からはローマ・カトリック教会枢機卿および主教、シリア正教会、アルメニア使徒教会、

ギリシア正教会、シリア・カトリック教会、ギリシア・カトリック教会の各代表者が出席した。他方で、聖ジョージ教会の記録には、エジプト領事館やイスラム系組織からの出席者については記されていない。

起工式は華やかに開催されたものの、依然として建物自体はなかったため、その後も3年にわたりミサは仮の場所で行われた。1991年からの3年間は毎年異なる学校施設を日曜ミサのために借用し、平日は1990年時とは別の輔祭が賃貸契約を結んでいた倉庫を利用した。

1994年1月には体育館、カフェテリア、教室が完成した。ここにいたって信徒はやっとみずからの建物でミサを行うことが可能となった。ただし、礼拝堂は建設途中だったため、礼拝は体育館で行われた。信徒が待ち望んだ礼拝堂は2年後の1996年11月に完成した。献堂式（新築の礼拝堂を聖別し、神にささげるためのキリスト教の儀礼）は、このために再びエジプトから訪れたシェヌダⅢ世総主教が司った。

### 6.1.2 現在の教会施設と信徒

聖ジョージ教会の敷地は約800m<sup>2</sup>と広い。1994年1月の付属施設完成から25年半以上が過ぎた2019年9月の調査時点で、敷地内には4、5階建ての教会が2堂建つ。最初にできた建物は信徒のあいだでは「主教会 (Main Church)」(以下、大礼拝堂)と呼ばれ、礼拝堂だけで最大約1,000人を収容する。信徒数の増加にあわせてのちに建てられた大天使ミカエル・チャペル (Archangel Michael Chapel, 以下、小礼拝堂) の礼拝堂は約400人を収容する。どちらの建物も日曜学校のための部屋などを併設しており、大礼拝堂は体育館とカフェテリアも有する。敷地内にはこれら2棟のほかに保育施設棟もあり、州公認 (CPE: Centre de la petite enfance) と民間 (Garderie) の2つの形態で運営している。前者は0～5歳児を最大80名収容し、信徒以外の子どもも受け入れている。

信徒数に関しては、前述のとおり教会側は正確な数値を公表していない (も

しくはそもそも集計していない)が、2014年の調査時に司祭の1人が約1,700世帯と述べている。常駐の司祭は4人おり、このうち2人が1世、残りの2人は2世である。コプト正教会では、司祭の妻帯が認められていることから、これら4人の司祭は全員妻帯者である。ミサに参加する信徒の大多数が家族で来ており、年代は乳幼児から高齢者まで幅広い年齢層の信徒が集う。30歳代以上は大半が既婚者で、その多くが20歳代で結婚し2人以上の子どもがおり、少子高齢化が進むケベック(大石, 2015b, p. 42)とはまったく状況が異なる。また10歳代後半から30歳代前半までの多くの若い信徒は家族とともにミサに出席するだけでなく、貧困者や高齢者の支援ボランティアなどを行うユースグループの活動を通じて、教会の運営に主体的かつ積極的に携わっている(岩崎, 2017)。

信徒の世代は1世から3世までで、1989年の教会設立前からモンリオールに住むオールドカマーもいれば、2019年に来たニューカマーも少なくない。とくに2011年以降、ニューカマーの数が増えているが、先述のとおり、これは同年に起きた「1月25日革命」の影響でエジプトの政治、社会、経済が大きく変動したことと関係している(岩崎, 2017)。

教育レベルや経済状況に目を向けると、カナダに移民した時期を問わず、比較的高学歴で、生活に余裕のある信徒が少なくない。なかには医学や工学の博士号を持ち、医療機関や大手企業で働く信徒もいる。そこまでではなくとも、20歳代以上の多くの信徒が大学在学中か学士号以上の学位を持ち、連邦政府や企業で働く安定した生活を送っている。経済的に困窮している信徒の姿は見当たらない。ただし、そうした信徒は教会から足が遠のき、その存在が不可視化されている可能性もあるため、注意が必要である。

使用される言語は場により異なる。ミサではアラビア語、コプト語、英語、フランス語が用いられる。ミサで中心となる言語は、大礼拝堂ではアラビア語、小礼拝堂では英語で、それ以外の言語も常にスクリーンに映し出される。また、ミサの一部は、マルチリンガルの司祭や輔祭により、前述した4つの言語でも



行われる。

信徒の多くはアラビア語と英語のバイリンガルで、2世のなかにはフランス語も加えたマルチリンガルも少なくない。信徒間の日常会話は、1世同士や1世と1.5世や2世のあいだではアラビア語が用いられる一方、1.5世以下の世代間では英語を用いる場合が多い。フランコフォンの学校で教育を受けた2世同士はフランス語で会話することもある。

## 6.2. 聖ジョージ教会が持つ多様な機能

移民にとって教会やモスクや寺院は様々な機能を有しており、福田（2007）はその諸機能を宗教的機能、教育的機能、社会的機能、政治的機能、経済的機能の5つに分類した。聖ジョージ教会も様々な活動を行っており、一部は複数の機能を同時に持つそれら諸活動は、福田の5分類に即して考えることが可能である。ミサ、日曜学校、聖書勉強会は宗教的機能、日曜学校とユースグループ活動は教育的機能を果たす。コプト正教会は教会としての政治参加は禁じているものの、信徒の政治参加は自由であるため、2019年には女性信徒2名が下院選挙に立候補した。これは政治的機能としてとらえることができるだろう。経済的機能はエジプトやアフリカのコプト正教会への人的・金銭的支援、ニューカマーの定住支援が当てはまる。社会的機能については数多くの活動が該当することから、次節で焦点をあて考察を深める。

パットナム（2001）は「人々の協調行動を活発にすることによって社会の効率性を改善できる、信頼、規範、ネットワークといった社会組織の特徴」をソーシャル・キャピタル（社会関係資本）と定義し、これを生み出す2種の社会構造を「結束型（bond）」と「橋渡し型（bridge）」に分類した。「結束型」は集団内の信頼や互酬性を促すことで集団の等質性と結束を強化する内向きの指向性を持つ一方、「橋渡し型」は異質なメンバーを結びつける外向きの性質を帯びる。そして、移民の宗教組織はこの2つの性質をあわせ持つソーシャル・キャピタルとなることがある（白波瀬、2018）。以下では、聖ジョージ教会の

社会的機能をこの2つの型に分けて考察する。

### 6.3 聖ジョージ教会が持つ社会的機能

#### 6.3.1 結束型の社会的機能

日曜朝のミサはもっともコプト移民の結束が強まる場である。聖ジョージ教会では通常午前8時前後から10時前後までミサが行われるが、計1,400人を収容する2つの礼拝堂は常に満席で、堂内にすら入れずに扉の外から参加する信徒もいる。エジプトのミサではアラビア語とコプト語が用いられるが、海外の教会ではこれらにホスト社会の言語が加わる。聖ジョージ教会の場合、アラビア語、コプト語、英語、フランス語の字幕が前方のスクリーンに映し出され、司祭や輔祭が中心的に使用する言語は大礼拝堂ではアラビア語、小礼拝堂では英語である。金色に光るイコン、臙脂色の布で包まれた聖遺骸、金糸の入った白い祭服を着た男性のみから成る司祭、輔祭、聖歌隊、男女に分かれた一般信徒席、司祭の振り香炉から流れでる白い煙と乳香の香り、コプト語とアラビア語による祈りの言葉と讃美歌、これらはエジプトで生まれ育った1世にとっては故郷を思いださせるものであり、2世、3世にとっては幼児洗礼によって生まれて間もないころから親しんでいる文化である。そこには彼らが日常的に教会外で経験するいわゆる西洋文化とは異なる世界が広がっている。

ミサ終了後は、学齢期の子どもたちは年齢に応じた日曜学校のクラスでキリスト教の知識や簡単なコプト語を学ぶ。10歳代後半から20歳代を中心とする若者は集會室でディスカッションや交流会を行う一方、日曜学校の教師を務める者も多い。子どもたちを待つ必要のない大人たちのなかには、10人前後で連れ立って教会から少し離れたカフェテリアで朝食をとりながら関係を深める信徒も少なくない。

教会の人間関係は日曜ミサ以外の場でもつづく。大学やCEGEP (Collège d'enseignement général et professionnel, ケベック特有の大学準備教育や専門教育のための機関)に通う若者は頻繁にユースグループとして集まり、ホームレ

ス支援や高齢者施設訪問などのボランティア活動、夏や冬の旅行などを通じて親睦を深める。こうした活動を通じて親しくなった信徒同士が結婚することも多く、聖ジョージ教会では筆者の知る20～30家族のうち、コプトと非コプトが結婚している夫婦は1組のみである。彼らの場合も、非コプトである夫はコプト正教会と同じ東方諸教会に属するアルメニア使徒教会信徒であり、思春期の頃から聖ジョージ教会に通っていたため、コプト同士の関係に近い。

なおコプト正教会では離婚は原則として認められておらず、一度築かれた夫婦関係は一方が亡くなるまでつづく。このためコプト正教会コミュニティ内部のメンバー構成が離婚や再婚によって変化することは稀である。この点もコミュニティの結束が強い要因の1つであろう。

聖ジョージ教会内だけでなく、他国も含めたコプト・コミュニティ全体の結束を強める活動として、他のコプト正教会との交流も挙げられる。この約20年のあいだに聖ジョージ教会にはエジプトから総主教が計3回訪れ（1991年、1996年シェヌーダ三世、2014年タワードロス二世）、主教や修道士などは年間何人も滞在している。2015年8月にはイギリスのコプト正教会の広報官として活躍するアンゲーロス主教（2017年にはロンドン大主教に就任）が若者に向けた講演会を行った。また、こうした高位聖職者による訪問だけでなく、他のコプト移民コミュニティの一般信徒とも互いの教会を訪問しあう活動を行っている。たとえば2017年8月には、アメリカのコプト正教会の信徒30～40名が聖ジョージ教会を訪れ、カフェテリアで食事会を行った。

筆者の知る聖ジョージ教会のコプトの多くが、プライベートの時間をともに過ごすのは教会のメンバーであり、それは筆者が調査しているフランスのコプト移民1世たちにも共通している。このように、コプト正教会は祈りの場としてだけでなく、所属教会内部の信徒間の関係、また彼らとエジプトや第三国のコプト正教会およびその信徒との関係を構築し、維持し、強化する場として結束型の社会的機能を有しているといえよう。

### 6.3.2 橋渡し型の社会的機能

聖ジョージ教会はコプト以外の宗教的コミュニティや地域コミュニティとの関係を持つことにより、これら他コミュニティとコプトとのあいだの橋渡しの機能も果たしている。かつて彼らが自身の礼拝堂を有していなかった時期には、日曜ミサの際には他宗派の礼拝堂を借りていた一方、現在は、彼らが別の宗派の日曜ミサのために礼拝堂を貸している。また、コプトの大半はエジプトにルーツを持つものの、聖ジョージ教会にはポーランドやナミビア出身の改宗（派）者があり、非エジプト系の人々に対しても開かれている<sup>22)</sup>このようなことから、聖ジョージ教会は信徒に対してコプト以外の人々や宗派、文化とも触れ合う機会を提供している。

教会が主催するイベントの場が橋渡し型の社会的機能を果たすこともある。6章1節でみたとおり、聖ジョージ教会は1991年の礼拝堂建設開始記念式典を開催した際、連邦・地方両政府や宗教組織の多くの要人を招待した。出席者のなかには、連邦政府の大臣、ケベック州首相、関連する地域の市長、カトリック教会、東方正教会、東方諸教会の各代表者があり、聖ジョージ教会がホスト社会や他のキリスト教コミュニティとの橋渡しの役割を担っていることが分かる。

特定のイベントがコプト移民とホスト社会の橋渡しをすることもある。2014年4月、聖ジョージ教会ではともに2世である司祭夫妻が中心となってキリストの復活を祝い、近隣地域を廻るパレードを行った。教会からは多様な年齢、世代、性別、カナダ在住歴の信徒が200人近く集まり、教会の名やキリストの復活を祝う言葉が英語とフランス語で書かれたプラカード、十字架、磔刑のイエスの絵などを掲げ、ときには英語で讃美歌を歌いながら近隣の住宅街を2時間近くかけてゆっくりとまわった。住民の迷惑にならないよう、オールドカマーの1.5世や2世はニューカマーや子どもたちに「大声を出さないように」、「道路一杯に広がらないように」と常に気を配っていた。途中、20歳代でニューカマーの2世の女性2人が民家を訪問し、聖ジョージ教会の情報が掲載され

たチラシを渡そうとしたところ、オールドカマーの20歳代の女性がすぐさま止めに入った。その後パレード終了時にこれを伝え聞いた1人の司祭の妻は驚き、「コプト正教会が無理な勧誘を行うカルト集団であると誤解されないためにも、そうした行為はやるべきではない、本人たちにはあとで注意する」と少し強い口調で述べた。

フォレイとホージは移民の宗教が公的空間におけるコミュニケーションスキルを高めることを指摘しているが (Foley and Hoge, 2007), この事例はそれに当てはまる。公道での大声での会話や明らかな宗教実践は、コプトのルーツがあるエジプト社会では比較的許容されるが、カナダ社会では迷惑行為とされる可能性がある。また、みずからの信仰について見ず知らずの相手に宣伝することもカナダでは一般的ではない。こうした2つの社会の文化的違いをふまえたオールドカマーによるニューカマーに対する注意や呼びかけは、前者がカナダで生活を送るうえでのコミュニケーションスキルの育成に一役買っているといえるだろう。

## 7. むすびにかえて—— 結束と橋渡しの融合としての 宗教組織の危機対応

2020年3月以降、新型コロナウイルスが世界的に感染拡大し、エジプトにもカナダにも（そして日本にも）深刻な影響を及ぼすこととなった。とくにカナダは同年4月5日の段階で感染者数が世界で13番目に多い12,978人だった (Johns Hopkins University, 2020)。予断を許さぬ状況のなか、コプト正教会では、エジプトの総主教、カナダのモントリオール主教と聖ジョージ教会がとった対応は、コプト正教会内部の結束を強めるとともに、コプト移民コミュニティとホスト社会との橋渡しの機能も果たした。

新型コロナウイルスに関するケベック州政府、州内の他の宗教コミュニティ、コプト総主教、モントリオール主教の2020年3月の動きはつぎのようなものだった。12日に州首相の命により250人以上の集会が禁止されると (CBC,

2020)、同日にはケベック・カトリック主教会議 (The Assembly of Quebec Catholic Bishops) が州内の教会でのミサ中止を宣言した (CTV News, 2020)。13日にはイスラーム系組織のカナダ・ムスリム医療協会 (The Muslim Medical Association of Canada) とカナダ・イマーム評議会 (the Canadian Council of Imams) が金曜礼拝の中止を宣言した (The Globe and Mail, 2020)。州首相からはその後も外出制限にかかわる声明が発表され、24日には不要不急のすべてのビジネスが停止された (National Post, 2020)。

一方コプト正教会に関しては、3月16日にエジプトのコプト正教会広報官が少人数の祭祀以外の儀礼の中止を指示、21日には総主教を長とするコプト正教会の代表機関である聖シノド (Holy Synod) がエジプト国内の全教会の閉鎖を決定し、海外の信徒に対しても居住先の関係当局の指示に従うよう求めた (Egypt Independent, 2020a, b)。カナダのコプト正教会では、モントリオール主教が3月23日に教区内の信徒に対して信仰実践に関する指針を公表し、「東部カナダの状況は刻々と変化しており、オンタリオとケベックに適用された政府の最新のガイドラインと規制に照らし合わせ、我々はコミュニティーのリーダーかつ責任ある構成員としてこれに順応し、従い、協力しています」というメッセージとともに、つぎの4点を指示した。①司祭は信徒に対して聖体拝領を行わない。②ミサは各教区の状況に合わせて行われ、輔祭は2名まで。③司祭は信徒宅訪問も病者の塗油も行わない。④電話による告解を認める (Virgin Mary Coptic Orthodox Church, 2020)。

聖ジョージ教会は少なくとも3月20日の時点でミサをすべてオンラインに切り替えていた。数人の司祭と輔祭だけが大礼拝堂でミサを行う様子をYouTubeでライブストリーミングし、終了後も教会の公式チャンネルで常時配信している。同教会は、コロナ禍以前から礼拝堂に來られない信徒のためにミサの様子をオンラインでストリーミングしていたため、新規な取り組みというわけではなかったが、前例のない危機的状況だからこそ、オンラインであってもミサがつづけられることは多くの信徒にとって信仰や精神衛生上の助けと

なった。

このように総主教はエジプト以外の国に住む信徒についても言及することで、彼らもまたコプト正教会の庇護下にあることを示した。モンテリオール主教は電話による告解を認めるなど一時的に規定を緩めることで、信徒が教会とのつながりを維持できるよう柔軟な対応をとった。これらはコプト正教会という組織内部の結束を強める対応だったといえよう。その一方で、これらコプト正教会指導者たちは信徒に対して現地政府（関係当局）の指針に従うことも要請しており、コプト移民がホスト社会のなかで円滑に生活するための橋渡しの役割も果たした。聖ジョージ教会はコプト総主教の声明が発表される前から一般信徒に対してはオンラインミサのみに切り替えており、ケベックの状況を見ずから見極め柔軟に対応していた。このようにコプト正教会は多様な機能を果たしながら、移民である信徒が信仰を維持するのを助け、教会と信徒また信徒間の結束を強化する一方、彼らとホスト社会との橋渡しをしている。

## 注

- 1) コプト正教会自身は、総主教を筆頭にマイノリティという自称も他称も認めていない（Weber, 2013）。詳しくは注14参照。
- 2) アラビア語は大別するとアラビア語圏全域に共通する書き言葉である正則アラビア語（フスハー）と、国や地方によって異なる話し言葉である方言（アンミーヤ）に分けられ、単語や表現によっては、両者の間、また、各方言の間でかなりの違いがある。
- 3) 本稿ではロンバウト（Rumbaut, 2002）による移民の世代（generation）分類に従い、移民時の年齢が18歳以上を1世、18歳未満を1.5世、ホスト国生まれで親の出身地が外国である人を2世と定義する。なお、厳密にはロンバウトは1.0世、1.5世、2.0世、2.5世（両親のうち1人が外国生まれ）という分類を用いている。
- 4) ラミ・マレックとメナ・マスードの略歴はNPR Musicの各人へのインタビュー番組を参照した（ラミ・マレック：<https://www.npr.org/transcripts/669850052?storyId=669850052?storyId=669850052>, メナ・マスード：<https://www.npr.org/2019/05/26/727107500/mena-massoud-on-being-aladdin>, いずれも2021年10月11日最終確認）。カナダ、アメリカ、イギリス、日本に住むコプトに対する筆者の調査では、聖職者も含む複数のインタビューイが「ラミ・マレックは（コプト正）教会を離れた」と理解し、彼をコプトの代表とみなすことには否定的だった。その一方でこれとは逆に、エジプトで生まれ育ち、現在はイギリスのプレミアリ

- ーグで成功を収めるムスリムのサッカー選手モハメド・サラール（Muhammad Salah）については、多くのコプトが「エジプトの王」（The Egyptian king, al-malik al-Maṣrī）として応援している（岩崎，2018）。マレックとサラールに対するコプトの認識の違いは、移民の信仰やエスニシティ、ナショナル・アイデンティティなどを考えるうえで興味深い。
- 5) カナダでもっとも人口が多い都市トロントの人口は2,731,571人、モントリオールは1,704,694人である（Statistics Canada, 2017c）。
  - 6) ただしコプトのなかにはみずからをアラブ系とみなさない者も少なくない。通常、アラブ地域とは東側からオマーン、イエメン、UAE、カタール、バハレーン、クウェート、サウディアラビア、イラク、パレスティナ、ヨルダン、シリア、レバノン、エジプト、リビア、チュニジア、アルジェリア、モロッコ、モーリタニア、西サハラから成る地域を指す。ただし、筆者がこれまでに出会ったシリア、レバノン、エジプト、チュニジア出身者のなかにはアラブ人であることを否定する者もいる。こうした人々にとってアラブ人とはアラビア半島出身者を意味し、歴史的連続性はともかく、彼ら自身は各地域の先住民族（フェニキア人や古代エジプト人など）のみずからのルーツとしている。また、アラブ地域には、クルド人、ヌビア人、アマーズィーグ（ベルベル人）など多様な民族がアラブ人到来以前から存在し、彼らは現在でも独自の民族的アイデンティティを有している。こうしたことから、アラブ系を自認しないこのようなアラブ地域出身者のエスニシティや民族的アイデンティティについて語る際には注意が必要である。たとえばイード（Eid, 2007, p. x）は、アラブ諸国にルーツを持つカナダ人をアラブ系住民という均質な集団としてとらえることの問題点について指摘している。
  - 7) 外国語の表記に関して、本稿では「モントリオール」のように英語の発音に従った表記が定着している地名は慣例に従うが、「ピエールフォン・ロクスボロ」など英語話者もフランス語の発音で呼ぶ地名はフランス語の発音に従ったカタカナで表記し、初出の際には括弧内にフランス語を表記する。また、エジプトに関連する用語や人名については、必要に応じて括弧内に正則アラビア語のローマ字転写を表記する。
  - 8) 教会用語は原則として正教会に用いられる和訳に従うが、「聖母」や「ミサ」など一般的に知られている用語はそのまま用い、必要に応じて直後の括弧内に正教会での和訳と英訳を補足する。
  - 9) カナダ政府による定義で、「先住民族を除く非白人系人種もしくは（肌の）色が白くない人々」（括弧内引用者）のことを意味する（Statistics Canada, 2021b）。
  - 10) コプトに伝わる伝承では福音書記者のひとり聖マルコによって西暦1世紀にもたらされたこととされる（アティーヤ，2014，p. 47）。しかし、古代キリスト教史の史実に照らし合わせると、聖マルコを初代とするアレクサンドリア主教のリストのうち、2世紀末までの部分に関しては明らかとなっていない（戸田，2017，p. 26）。
  - 11) 非カルケドン派という名称は、イエス・キリストの人性と神性をめぐりキリスト論についての議論がなされた451年のカルケドン公会議において、キリストの人性と神性の両者



を重視する両性説を正統とみなしたカルケドン信条を受け入れなかったとされる地域の人々がのちに形成した諸宗派を指す。コプト正教会、シリア正教会、アルメニア使徒教会などがこれに当たる。両性説を採用した西方教会とのあいだで起きた論争はキリスト教会最初の大分裂につながったが、アティーヤ（2014, pp. 107）によればコプト正教会は一貫して両性説を支持してきたという。

- 12) 正確には 87,963,276 人 (CAPMAS, 2015)。
- 13) 近年のエジプトでは宗教別人口の政府統計は取られていないため正確な数は不明だが、過去の統計などをもとにした研究者のあいだでは総人口の 10%前後とする場合が多い (岩崎, 2017)。なお、エジプトにはムスリムとコプト以外にも、非常に少数ながらバハイ一教徒などが存在する (岩崎, 2009)。
- 14) 近年では 2013 年 2 月の AP 通信によるインタビューに対するタワードロス II 世総主教のつぎの言葉がそのことを端的に表している。「我々はこの国 [エジプト] の土の一部であり、キリストに先立つファラオとその時代の延長 [にある存在] である。我々は数値の上ではマイノリティーである。しかし、我が国に対する価値、歴史、交流、愛という点では、マイノリティーではない」(Weber, 2013, [ ] 内は引用者)。イスカデルはコプトがマイノリティーという呼称を拒絶する理由として、この語がムスリムとコプトの差異を強調し、それがムスリムからコプトへの暴力へとつながるのではないかというコプト側の恐れが存在すると指摘している (Iskander, 2012, p. 105)。
- 15) この背景には、この年の国勢調査が詳細調査票の廃止、回収率の低さなどによりデータの質が低下したことがある (大石, 2015a)。
- 16) *Montréal in statistiques* (2018) ではピエールフォン・ロクスボロの 2016 年の総人口は統計対象により、69,297 人, 69,305 人 (ともに p. 7), 68,965 人 (p. 17), 68,830 人 (p. 18) と異なる数値が出てくるため、本稿では概算として 69,000 人とした。
- 17) アローラはカナダの首席統計官 (Chief Statistician of Canada) であり、この研究は 2016 年国勢調査の数値をもとにしている。
- 18) フランコフォンとアングロフォンの定義は矢頭 (2019, pp. 126-127) にもとづく。
- 19) 英字日刊紙『モンリオール・ガゼット』(*Montreal Gazette*) にはウェスト・アイランドに特化したコーナーがあり (*Montreal Gazette*, 2021), 筆者のインフォーマントのほとんどもこの一帯をウェスト・アイランドという名称で呼ぶ。
- 20) ケベック州のなかでアングロフォンがもっとも多く住む地域のほとんどは、モンリオールとその郊外に位置する。詳しくは大石 (2017) を参照のこと
- 21) 聖ジョージ教会の歴史は、Saint George and Saint Joseph, Montreal (公開年不明) と岩崎 (2017) に基づく。
- 22) 改宗 (派) 者は必ずしも聖ジョージ教会に限ったことなく、筆者が調査しているフランス、イギリス、日本のコプト正教会にも 1 教会あたり 2, 3 人は存在する。多くはコプトとの結婚によるものだが、なかにはみずからの意思で改宗 (派) した信徒もあり、筆

者の知る限り、少なくとも3名が司祭職に就いている（イギリス人1名、日本人2名）。

### 参考文献

- Ahmed, Y. M. (2007) *The New York Egyptians: Voyages and Dreams* (Cairo Papers in Social Science Vol. 30, No. 3), Cairo, The American University in Cairo Press.
- Angaelos (2000) *The Altar in the Midst of Egypt: A Brief Introduction to the Coptic Orthodox Church*, Stevenage (U. K.), The Coptic Orthodox Church Center.
- アティーヤ, アズィーズ (2014) 『東方キリスト教の歴史』村山盛忠訳, 教文館 (*A History of Eastern Christianity*, Methuen & Co., 1968)。
- BBC News (2011) “Cairo clashes leave 24 dead after Coptic church protest”, 10 October 2011. <https://www.bbc.com/news/world-middle-east-15235212>
- BBC News (2018) “Coptic Christian attack: Funerals in Egypt for seven murdered pilgrims”, 3 November 2018. <https://www.bbc.com/news/world-middle-east-46082927>
- Berry, J. W., & Sam, D. L. (1997) “Acculturation and Adaptation,” J. W. Berry, M. H. Segall & Kagitcibasi, C. (Eds.), *Handbook of Cross-Cultural Psychology: Vol. 3, Social Behavior and Applications*, 2<sup>nd</sup> ed., Needham Heights, Allyn and Bacon, pp. 291-326.
- Bingham-Kolenkow, Anitra (1997) “The Copts in the United States of America”, van Doorn-Harder and Vogt, Kari (eds.), *Between Desert and City: The Coptic Orthodox Church Today*, Oslo, The Institute for Comparative Research in Human Culture, pp. 265-272.
- Botros, Ghada (2006) “Religious Identity as an Historical Narrative: Coptic Orthodox Immigrant Churches and the Representation of History”, *Journal of Historical Sociology*, Vol. 19, No. 2, pp. 174-201.
- Breton, Raymond (1964) “Institutional Completeness of Ethnic Communities and the Personal Relations of Immigrants”, *American Journal of Sociology*, Vol. 70, No. 2, pp. 193-205.
- Brinkerhoff, Jennifer M. and Riddle, Liesl (2012) *General Findings: Coptic Diaspora Survey* (GW Diaspora Program), Washington D. C., The George Washington University.
- CAPMAS (Arab Republic of Egypt Central Agency for Public Mobilization and Statistics) (2015) “Egypt Figures in 2015: Population”. <https://www.sis.gov.eg/newvvr/EgyptinFigures2015/EgyptinFigures/Tables/PDF/1-%20%D8%A7%D9%84%D8%B3%D9%83%D8%A7%D9%86/pop.pdf>
- CBC (2020) “Quebec ramps up fight against COVID-19: Large indoor events banned, Montreal shuts pools and rinks”, 12 March 2020. <https://www.cbc.ca/news/canada/montreal/covid-quebec-march12-1.5494882>
- 中東教会協議会 (編) (1993) 『中東キリスト教の歴史』村山盛忠, 小田原緑訳, 日本基督教団出版局 (*Newsletter: Center for the Study of Islam and Christian-Muslim Relations*, 1982 および *MECC Perspectives*, 1986. いずれも出版社不明)。
- CTV News (2020) “COVID-19: Quebec bishops announce cancellation of all Catholic masses in

- the province”, 12 March 2020. <https://montreal.ctvnews.ca/covid-19-quebec-bishops-announce-cancellation-of-all-catholic-masses-in-the-province-1.4850711>
- 土門稔 (2016) 「日本初のコプト正教会開堂式 京都府木津川市で教派越え 100 人が参列」『クリスチャン・トゥデイ』, 2016 年 7 月 23 日。 <https://www.christiantoday.co.jp/articles/21519/20160723/coptic-orthodox-church-sydney-kizugawa-kyoto.htm>
- Egypt Independent (2020a) “Churches in Egypt suspend activities to slow spread of coronavirus”, 16 March 2020. <https://egyptindependent.com/churches-in-egypt-suspend-activities-to-slow-spread-of-coronavirus/>
- Egypt Independent (2020b) “Egypt’s Coptic Orthodox Church closes churches, stops ritual services, masses”, 21 March 2020. <https://egyptindependent.com/egypts-coptic-orthodox-church-closes-churches-stops-ritual-services-masses/>
- Eid, Paul (2007) *Being Arab : Ethnic and Religious Identity Building among Second Generation Youth in Montreal*, Montreal, McGill-Queen’s University Press.
- 福田友子 (2007) 「移民による宗教団体の形成 —— 滞日パキスタン人ムスリムを事例として」『日本都市社会学会年報』第 25 号, pp. 63-78.
- The Globe and Mail (2020) “Mosques across Canada cancel, alter Friday prayer to limit spread of coronavirus”, 13 March 2020. <https://www.theglobeandmail.com/canada/article-mosques-across-canada-cancel-alter-friday-prayer-to-limit-spread-of-2/>
- Hasan, S. S. (2003) *Christians versus Muslims in Modern Egypt : The Century-Long Struggle for Coptic Equality*, Oxford, Oxford University Press.
- Iskander, Elizabeth (2012) *Sectarian Conflict in Egypt : Coptic Media, Identity and Representation*, Oxford, Routledge.
- 岩崎真紀 (2009) 「イスラーム社会における改宗 —— 宗教という境界をめぐる」荒川歩ほか編著『〈境界〉の今を生きる —— 身体から世界空間へ若手 15 人の視点』東信堂, pp. 41-55.
- 岩崎真紀 (2012) 「宗教的マイノリティからみた 1 月 25 日革命 —— コプト・キリスト教徒の不安と期待」国際宗教研究所編『現代宗教 2012』秋山書店, pp. 219-238.
- 岩崎真紀 (2013) 「コプト復興運動に関する一考察 —— 現代エジプトにおけるもうひとつの宗教復興」『哲学思想論叢』31 号, pp. 29-41.
- 岩崎真紀 (2017) 「コプト・ディアスポラの発展 —— カナダのコプト・キリスト教徒移民を事例として」三代川寛子編著『東方諸教会 研究案内と基礎データ』明石書店, 97-121 頁。
- 岩崎真紀 (2018) 「アラブ世界を鼓舞する『エジプトの王』モハメド・サラール」『季刊アラブ』165 号, 31 頁。
- Johns Hopkins University (2020) *Coronavirus COVID-19 Global Cases by the Center for Systems Science and Engineering (CSSE) at Johns Hopkins University (JHU)*. <https://coronavirus.jhu.edu/map.html>

- Kayal, Philip M. (1983) “Arab Christians in the United States”, Abraham, S. Y. and Abraham, N. ed., *Arabs in the New World : Studies on Arab-American Communities*, Wayne State University, Center for Urban Studies.
- Loewen, Rachel (2008) *The Coptic Orthodox Church in the Greater Toronto Area : The Second Generation, Converts and Gender*, MA-Thesis, McMaster University.
- Marcos, Marcos (1981) “The Copts of Canada : A Shining Star in a Galaxy of Diversified Celestial Bodies”, *Coptologia*, pp. 65-75.
- Montreal Gazette (2021) “West Island”. <https://montrealgazette.com/tag/west-island/>
- 三代川寛子 (2017) 「コプト正教会について」三代川寛子編著『東方諸教会 研究案内と基礎データ』明石書店, 20-25頁。
- Montréal in statistiques (2018) *Profil Sociodémographique Recensement 2016 : Arrondissement de Pierrefonds-Roxboro Édition mai 2018*, Montréal, Service du développement économique Ville de Montréal. [http://ville.montreal.qc.ca/pls/portal/docs/PAGE/MTL\\_STATS\\_FR/MEDIA/DOCUMENTS/PROFIL\\_SOCIOD%9MO\\_PIERREFONDS-ROXBORO%202016.PDF](http://ville.montreal.qc.ca/pls/portal/docs/PAGE/MTL_STATS_FR/MEDIA/DOCUMENTS/PROFIL_SOCIOD%9MO_PIERREFONDS-ROXBORO%202016.PDF) (数値は2016年国勢調査の結果に基づく)
- National Post (2020) “COVID-19 : Ontario and Quebec order non-essential business closed after spike in coronavirus totals”, 24 March 2020. <https://nationalpost.com/news/covid-19-ontario-and-quebec-order-non-essential-businesses-closed-after-spike-in-coronavirus-totals>
- Nihov (2020) “Nihov’s Worldwide Coptic Directory”, <http://directory.nihov.org/> (2010年開設, 最終更新2021年)
- 大石太郎 (2015a) 「カナダの国勢調査における詳細調査票の廃止とその影響」『E-journal GEO』第10号, 第1巻, pp. 18-24.
- 大石太郎 (2015b) 「ホスト社会としてのケベックのディレンマ——「ケベックの価値」憲章をめぐる論争から——」『国際学研究』4巻1号, 33-44頁。
- 大石太郎 (2017) 「カナダにおける二言語主義の現状と課題」『E-journal GEO』12号, 1巻, pp. 12-29.
- パットナム, ロバート M. (2001) 『哲学する民主主義——伝統と改革の市民的構造』川田潤一訳, NTT出版 (*Making Democracy Work : Civic Traditions in Modern Italy*, Princeton University Press, 1993).
- Rumbaut, Ruben. G. (2002) “Served or Sustained Attachment? Language, Identity, and Imagined Communities in the Post-Immigrant Generation”, Levitt, P. and Waters, M. C. ed. *The Changing Face of Home : The Transnational Lives of the Second Generation*, New York, Russel Sage Foundation, pp. 43-95.
- Saint George and Saint Joseph, Montreal, (公開年不明) “The History of St. George and St. Joseph Church”. [http://stgeorgesjoseph.ca/church\\_history.htm](http://stgeorgesjoseph.ca/church_history.htm)
- 白波瀬達也「カトリックにおける重層的な移民支援」(2018) 白波瀬達也, 高橋典史「『宗教

- と多文化共生』研究が目指すもの』『現代日本の宗教と多文化共生——移民と地域社会の関係を探る』明石書店, pp. 25-44.
- 白水繁彦 (1996) 「エスニック・メディアの現在」白水繁彦編著『エスニック・メディア——多文化社会日本をめざして』明石書店, pp. 13-56.
- St-George and St-Joseph Coptic Orthodox Church (2020) “St-George and St-Joseph Coptic Orthodox Church”. [https://www.youtube.com/channel/UCJhdT2ZYRr\\_xT-YIvJGs64Q/videos](https://www.youtube.com/channel/UCJhdT2ZYRr_xT-YIvJGs64Q/videos)
- Statistics Canada (2001a) “Religion (95) and Sex (3) for Population, for Canada, Provinces, Territories, Census Metropolitan Areas and Census Agglomerations, 2001 Census - 20% Sample Data – ARCHIVE”. <https://www150.statcan.gc.ca/n1/en/catalogue/97F0022X2001001>
- Statistics Canada (2007) “The Arab Community in Canada”. <https://www150.statcan.gc.ca/n1/pub/89-621-x/89-621-x2007009-eng.htm>
- Statistics Canada (2017a) “Immigrant population by place of birth, period of immigration, 2016 counts, both sexes, age (total), Canada, 2016 Census – 25% Sample data”. <https://www12.statcan.gc.ca/census-recensement/2016/dp-pd/hltfst/imm/Table.cfm?Lang=E&T=21&Geo=01&SO=4D>
- Statistics Canada (2017b) “Immigrant population by place of birth, period of immigration, 2016 counts, both sexes, age (total), Quebec, 2016 Census – 25% Sample data”. <https://www12.statcan.gc.ca/census-recensement/2016/dp-pd/hltfst/imm/Table.cfm?Lang=E&T=21&Geo=24&SO=4D>
- Statistics Canada (2017c) “Municipalities in Canada with the largest and fastest-growing populations between 2011 and 2016”. <https://www12.statcan.gc.ca/census-recensement/2016/as-sa/98-200-x/2016001/98-200-x2016001-eng.cfm>
- Statistics Canada (2019) “2011 National Household Survey : Data tables”. <https://www12.statcan.gc.ca/nhs-enm/2011/dp-pd/dt-td/Rp-eng.cfm?TABID=2&LANG=E&A=R&APATH=3&DETAIL=0&DIM=3&FL=A&FREE=0&GC=01&GL=-1&GID=1118296&GK=1&GRP=0&O=D&PID=105399&PRID=0&PTYPE=105277&S=0&SHOWALL=0&SUB=0&Temporal=2013&THEME=95&VID=21289&VNAMEE=&VNAMEF=&D1=0&D2=0&D3=0&D4=0&D5=0&D6=0>
- Statistics Canada (2021a) “Immigrant”. <https://www23.statcan.gc.ca/imdb/p3Var.pl?Function=Unit&Id=85107>
- Statistics Canada (2021b) “Visible minority of person”. <https://www23.statcan.gc.ca/imdb/p3Var.pl?Function=DEC&Id=45152>
- Stene, Nora (1997) “Into the Lands of Immigration”, van Doorn-Harder and Vogt, Kari (eds.), *Between Desert and City: The Coptic Orthodox Church Today*, Oslo, The Institute for Comparative Research in Human Culture, pp. 254-264.
- Suleiman, Michael W. (1999) “Introduction : The Arab Immigrant Experience”, Suleiman, M. W. ed., *Arabs in America : Building a New Future*, Temple University Press.

- 高橋典史「日本におけるインドシナ難民の地域定住と宗教の関わり——ベトナム難民の事例を中心に」（2018）白波瀬達也，高橋典史『『宗教と多文化共生』研究が指すもの』『現代日本の宗教と多文化共生——移民と地域社会の関係性を探る』明石書店，pp. 67-88.
- 戸田聡（2017）「コプト教会・古代」三代川寛子編著『東方諸教会 研究案内と基礎データ』明石書店，26-30 頁。
- United Nations（2020）“Refugees and Migrants”. <https://refugeesmigrants.un.org/definitions>
- van Dijk, Joanne and Botros, Ghada（2009）“The Importance of Ethnicity and Religion in the Life of Immigrant Churches: A Comparison of Coptic and Calvinist Churches”, *Canadian Ethnic Studies* Vol. 41, No. 1-2, pp. 191-214.
- van Nispen tot Sevenaer（1997）“Changes in Relations between Copts and Muslims (1952-1994) in the Light of the Historical Experience”, van Doorn-Harder and Vogt, Kari (eds.), *Between Desert and City: The Coptic Orthodox Church Today*, Oslo, The Institute for Comparative Research in Human Culture, pp. 22-34.
- Virgin Mary Coptic Orthodox Church（2020）“Important Diocese Update from H. G. Bishop Boulos”, 24 March 2020.  
<http://virginmarymtl.org/important-diocese-update-from-h-g-bishop-boulos-click-here/>  
（上記 URL は 2020 年 7 月 30 日時点では有効だったが，2021 年 10 月 11 時点では無効となっている）
- Weber, Katherine（2013）“Egypt’s Coptic Leader: ‘Christians Are Not a Minority in Terms of Value to the Nation’”, *Christian Post*. <https://www.christianpost.com/news/egypts-coptic-leader-christians-are-not-a-minority-in-terms-of-value-to-the-nation-89697/print.html>
- 矢頭典枝「多文化社会カナダのバイリンガル国家運営－英語とフランス語が国民をつなぐ－」『グローバル・コミュニケーション研究』7号，123-134 頁。
- \* ウェブサイトの最終閲覧日は一部説明がある部分以外は 2021 年 10 月 11 日。

付記：本稿は 2015 年度～2018 年度科学研究費補助金（15K02053）および 2019 年度  
松山大学特別研究助成による研究成果の一部である